

もくじ

| | |
|-------------------------------------|---|
| 生理人類学あれこれ(7) | 1 |
| 学会各賞受賞者の言葉 | 4 |
| 第 86 回大会(関西医科大学)案内(第 1 報) | 9 |

■生理人類学あれこれ(7)

「生理人類学のキーワードとこれから」

安河内朗(九州大学)

“生理人類学あれこれ”では、日頃思うことを書いてみようというそもそもの趣旨があります。今回もそのつもりで読んでください。

生理人類学が追い求めるものは「環境への適応」の実態の把握やそのメカニズムであり、さらに適応のあり方の多様性とそのしくみや原因(必然性)であると思っています。「環境への適応」については生物体としての環境への適応という意味になります。「人類に関する自然の理を明らかにする(坪井小五郎, 1886 年)」として始まった日本の人類学の中で、生理人類学ではヒトを中心とした“生物体”を扱います。ここでは生物学的存在を“ヒト”とし、文物の存在を表現するときは“人”とします。しかし“ヒト”と“人”とは明確に区別できるものではありません。例えば、“人の心”が脳の神経回路を基盤とするものであれば、それは生物学的な function の結果といえます。“人の心”が行動を誘発し、個々の行動の集まりが“情動”や“共感”を介してさまざまな社会的規範や文

化を形成するならば、これらはやはり function の結果ともいえます。そういう意味では、“ヒト”と“人”は区別するというよりも連続性のあるもの、あるいは一体となるものという考えが背景にあってもよいでしょう。生理人類学の生理は physiology であると同時に“生きる理”と捉える佐藤方彦の考え方にも相通ずるものがあります。

さて、生理人類学には学問としての体系化を図る 5 つのキーワードがあります。「環境適応能」、「生理的多型性」、「全身的協関性」、「機能的潜在性」、「テクノアダプタビリティ」の 5 つです。このうち、全身的協関性と機能的潜在性は環境適応能を構成するもの、あるいは環境適応能のメカニズムを追求するアプローチとなるものと捉えています。そして環境適応能(全身的協関性、機能的潜在性)の多様性を示すのが生理的多型性です。最後のテクノアダプタビリティは、環境適応能と重なる部分がありますが、しかし環境適応能に包含されるものではないと考えています。それは先述のヒトと人を一体として捉えるところに通じますが、これについては後で少し触れます。まずは「生

理的多型性」について再度考えます。「生理的多型性」については、すでに PANews Vol.31, No.2 Aug. 2021 でも言及しているのですが、ここで再度取り上げることになります。

私は「生理的多型性」を「生理的多様性」という表現にする方がより望ましいと考えています。「多型性」という表現はタイプに分けられるという印象があります。この場合、タイプとタイプの間には境界があるかのような感じです。しかしこの表現のよいところは、タイプに分けることでさまざまな環境への適応戦略の違いを示しやすくなる点です。そうすることで機能的潜在性を基盤にした全身的協関の様相が環境の特性によって特異的に変わることを示せます。その戦略の概要を典型的に示せる点で“多型性”という表現を用いるのはよいでしょう。ただこの場合、“多型性”はあたかも集団特性の平均値的な違いを示すことになります。これでは適応の実態を表すまでにはいたりません。タイプとタイプの境はなく、両者を繋ぐ連続的な変化があれば多型性という表現は曖昧になります。これに対して、多様性という表現は、タイプの区切りと連続する変化の両者の意味合いを含むので、まだ多型性よりは望ましい表現と考えるわけです。また多型性には固定的な、あるいは普遍的な印象を与えかねません。例えば寒冷適応のタイプに代謝型適応や断熱型適応があるように。このように多型性には、ある環境要因に対する有利な生物学的特性に違いのあることを示しますが、環境要因そのものが時間(時代)とともに変化すれば有利な生物学的特性は維持されなくなるでしょう。イヌイットの人たちが、近代的な住生活を送り、ショッピングセンターの普及で食生活が大きく変わっていけば、いつまでも代謝型適応を示すとは限らないと思われまふ。また特定地域のヒト集

団と多型性を結びつけて固定化するところにも問題があります。すべてのイヌイットの人たちが代謝型を示すわけではなく、また代謝型を示すイヌイットの人たちがいつまでもそれを維持するとは限らないわけです。

いずれにしても、ヒトはさまざまな環境に対して集団として適応したり個体として馴化したりしますが、それは生物学的な戦略であり、さらにその戦略の様相は集団や個体が有する行動的特徴や遺伝的基盤などによって変わるものです。そういう複雑な要素が絡むなかで果たしてタイプとしてあるいは固定的なものとして仕分けられるものか、という疑問があります。そういう意味でも単に多様であるとした方が柔軟性があるように思えます。ここには、後述の「テクノアダプタビリティ」における人から環境側への操作の影響がかかわる問題があります。

さて「環境適応能」のキーワードに戻ります。これは、5つのキーワード内でみるかぎり機能的に適応がどのような構造(メカニズム)で生じるかを示そうとするものです。したがって、環境適応能の定義は現時点で全身的協関性と機能的潜在性の二つで概要を説明できなければなりません。今後不十分な点が生じてくれば、それを埋める新たなキーワードが必要になります。また全身的協関性や機能的潜在性の捉え方やデータとしての表現方法、あるいは二つのキーワードによる環境適応能の示し方も定かではありません。現在のところ全身的協関性は、測定可能な生体情報をもとに、例えば心拍出量についてはそれを構成する心拍数と一回拍出量による協関性で示したり、体温調節ではそれを構成する深部体温を中心とした代謝系や放熱系のバランスによる協関性で示したりします。しかし理想的には分子生物学的な視点を含めた遺伝子や細胞間コミ

コミュニケーションなどまでを含めたマイクロからマクロまでの入れ子構造の協関の様相,あるいは全身的協関性を駆動している神経系やホルモン系の働きなどをどのように表現できるのかといった問題があります。また機能的潜在性についても機能的に顕在する部分はある程度可視化できますが,一方の潜在部分にどの程度の容量があるのか,またその容量のすべてが顕在化できるのか,さらに潜在する機能が長期にわたって顕在化しないまま持続された場合それは減退もしくは消失するのか,などの問題があります。以上のように,さまざまな角度や次元からの継続的な議論を通してその都度皆で考え方を共有する必要があります。その結果,さまざまな解釈についてその時点における限界も共有できるわけです。

本来,“環境適応”には個体の一生の間に生じる同じDNA上の遺伝子発現制御を主たる基盤とした現象と,集団レベルにおける遺伝子型やその頻度などを基盤とした現象があります。そのためにも「環境適応能」の定義に個体と集団の両者を含んでしまうことができるのか,あるいは分けて(「環境適応能」を複数の表現に変えるなど)考えるのか議論が必要でしょう。同時に「環境適応能」がヒトと人の両者を含み得るものかについても改めて捉え直すことが必要です。さまざまな課題が山積する状況ではありますが,以下は環境適応能のある側面に対する私の考え方です。ここではテクノアダプタビリティと対比させて適応に作用する影響要因の方向性の観点から考えてみます。

現時点において「環境適応能」はあくまでも生物学的な表現であり,環境がヒト側に影響を及ぼして生存や生殖に有利な形態的,機能的変化をもたらすという,基本的には影響が環境側からヒトへ向かう一方向性を示します。個

体の場合では,例えば環境の何かしらの圧がヒトの遺伝子発現制御に影響を及ぼし,個体の生存や生殖に有利な状態をもたらします。また集団を考える場合でも,他個体より生存や生殖に有利に働く遺伝子型をもつものは他個体よりその遺伝子の特性を残しやすい。つまり環境側がその有利な遺伝子をもつ個体を選択します。「環境適応能」はいずれにしても,概して環境側がヒトに作用を及ぼすという一方向性のみの現象と考えます。

これに対して,「テクノアダプタビリティ」は環境からヒトへ及ぼす影響もあれば,人が環境側に影響を及ぼす方向も同時に存在します。つまり照明やエアコンはヒトに光や温熱のストレスとして作用し概日リズム位相や体温調節機能といった生物学的資質に影響を与える一方,照度や色温度,温度や湿度などの光や温熱の諸要因を制御することによって生活のしやすさの点から人から環境(モノ)側へ作用を及ぼすこととなります。また,人の作用により造成された人工環境が今度はヒト側へ再度影響を及ぼすことにもなり,ヒト(人)一環境間の作用の方向が相互に繰り返されます。また自らつくった環境から人側への影響要因は,例えば道具の操作性や誤操作からのものもあり,あるいは集団内におけるさまざまな規範や文化による拘束感からくるものもあります。これらは精神面(生理面)や行動に影響が及びます。このようなところに「環境適応能」と「テクノアダプタビリティ」のそれぞれに異なる特徴があると思います。そういう意味で現時点の「環境適応能」には自然と人工の両者のストレスが含まれ,テクノアダプタビリティも混在した中で評価されていることとなります。ここでは,このことを認識することが重要だと思います。

人の環境側への作用は何も今始まったこと

ではありません。おそらく 300 万年から 200 万年前に登場したホモ属のころ、脳容量の急速な増加とともに道具製作の技術が向上し、ついには農耕や牧畜の発明によって環境への作用規模が巨大化していきました。現在もその延長上にあるといえますが、しかし産業革命に飛躍が生じ、そして今また異次元の飛躍を起こそうとしているようです。携帯電話などの人の生活に密着した技術は生活環境のインフラストラクチャそのものを変えつつあります。広域ネットワークによる情報網、AI、ロボットも環境を大きく変えています。しかしこれまでとは全く異なる新たな様相が出てきました。それは生体改造や遺伝子編集にみられるように人がヒトそのものに作用を及ぼし始めていることです。人が自ら改変する環境、あるいはヒトそのものを改変することに人類集団がどのように適応できるのか、生理人類学者が探求すべき課題は実に大きいといえます。また先のホモ属のころから勢いを増したヒトが自ら創り出した文化とヒトとの共進化も併せて検討する必要があります。人類が文化をつくり出すという性向はすでにヒトの遺伝子にそのような方向に仕向ける選択があるという考えがあるからです。生物の原則に則って生きる“ヒト”と、快適に生きようとする“人”を一体として捉えていくところに、生理人類学のチャレンジがあります。そういう意味で、「テクノアダプタビリティ」は喫緊の課題として注目されるキーワードですが、これまで他のキーワード以上に議論されていません。「テクノアダプタビリティ」をどのように学問として捉えるのか、皆で整理しつつ多方面から議論し共有していく必要があります。

今回は、生理人類学の目的や課題、またそれらへのアプローチに向けた学問としての体系を考える観点から、生理人類学の 5 つのキ

ーワードとこれからの取組について概観してみました。キーワードはあくまでも考え方であり、前回の PANews“あれこれ”で眺めた最近の英文誌論文の動向でもわかるように、キーワードそのものが主題として扱われているわけでは必ずしもないのです。重要なのは環境適応能の体系的な捉え方であり、それを内面に据えて得られたデータでそれらをいかに表現できるかではないでしょうか。

キーワード自体を議論することは、生理人類学の学問としてのオリジナリティをより明確にかつ魅力的にするだけでなく、自分自身の研究の方向性を整理することにもなり、またその過程で新たな発見や指針がみえてくることに繋がります。学問の発展のみならず、生理人類学のオリジナリティや自身の研究の面白みをより豊かにするために、さまざまなかたちで議論の場を多く設けることを心から願っています。

■学会各賞受賞者の言葉

「日本生理人類学会賞を受賞して

一気が付けば四半世紀」

草野洋介(西九州大学)

2023 年度の日本生理人類学会賞の受賞を光栄に存じます。今回の受賞理由として、19 年間理事として本学会の運営に尽力したこと、2012 年 66 回大会の大会長を務めたこと、保健分野特に健康増進・老化領域に関わる生理人類学的研究を推進したことなどがあげられると思います。

初めてこの学会に参加したのは 1999 年に竹本泰一郎長崎大学医学部公衆衛生学講座教授が 42 回大会長を務めることになり、準備のため実践女子大での 41 回大会に参加した時でした。熱い真剣な討論に感銘を受けまし

た。長崎での大会では青柳潔事務局長の下、事務局を務めるとともにグラバー園での懇親会の司会を担当させていただきました。学会のことをあまりまだ理解していない上に雰囲気は飲まれボロボロで当時の菊池安行副会長に慰めていただいたことをよく覚えています(まさか、この学会に入会し、十数回も懇親会の司会を務めることになるとは思いませんでした)。福島での43回大会に竹本教授のお供で参加した際、懇親会2次会で安河内朗先生と宮崎良文先生に熱心にお誘いを受け、学会に入会することになりました。当時は科学研究費に生理人類学細目ができ、勉強会を重ね、5つのキーワードを含め生理人類学の概念を討議し学会が大いに発展した頃でした。当時の佐藤方彦会長の研究に対する考え方に強く影響を受けました。2006年には佐藤方彦先生が大会長の鎌倉で学会の総力挙げて開催した第8回国際生理人類学会議、エクスカッション担当理事として準備に鎌倉に通ったのは懐かしい思い出です。

公衆衛生学の研究者として地域保健を専門としていたのですがこの学会を通じて集団レベルにおける全体的協関を研究対象に決めました。一つは大阪市立大曾根教授、東北工大原田教授と共にオハイオ州立大学クルーズ教授との共同研究で老化の全体的協関の要因の研究を長崎県大島町・五島市で展開しました。

その成果を元に「離島の生態」がテーマの第6回人類学関連学会協議会合同シンポジウムにおいて「離島における健康に関する生理人類学研究」について発表する機会を与えていただきました。また健康日本21への健康寿命の概念の導入に伴い、健康寿命に対する全体的協関の要因の研究を長年行い、その

成果を健康ながさき21推進会議小委員会委員長として長崎県の健康づくりに提言を行ってきました。

この学会において協働していただいた先生方、そして長年指導していただいた竹本泰一郎先生、青柳潔先生に感謝いたします。最後になりましたが、愛する日本生理人類学会の益々の発展を祈念いたしております。今回は本当にありがとうございました。



図1.「若手」メンバーと(第7回国際生理人類学会議, 2004年, 米国コロンバズ市)

「学会賞, 誠にありがとうございます」

仲村匡司(京都大学)

このたび、日本生理人類学会の「学会賞」を頂戴しました。名誉ある賞に浴することを心から光栄に思うとともに、「自分がもろてもええんやろか」という戸惑いも正直なところ感じています。

私は情報発信担当として理事会の末席を汚しております。あるときの理事会で、自分が出席できなかった前回の理事会の議事録に目を通してありますと、学会賞授与決定の記録に草野洋介先生のお名前を見つけ、「順当順当♪」と独り言ちていました。そして、その下に自

分の名前が記されているのを見て「え、なんで!？」と、椅子からずり落ちそうになりました。学会の会員歴こそ長い方ですが、生理人類学の発展に資する研究を行ってきた自覚はなく、青天の霹靂とはこのことかと驚きました。選考にあられた先生方に心より感謝申し上げます。

私は大学の農学部に所属する「木材」の研究者で、本会の中ではかなりのマイノリティです。「木材」という材料を相手にしている研究者が「人」を対象とする研究領域に足を踏み入れたのは、木材の人への親しさの理由を調べていたことによります。木材学の分野では、木材が人に及ぼす心理的な影響が1980年代前半から調べられるようになり、世紀の変わり目あたりから生理的な影響をとらまえる機運が高まっていました。そんな中、この分野のパイオニアである宮崎良文先生から「入会金を負けておくから入らない?」というお誘いを受け、日本生理人類学会とのお付き合いが始まります。

私は入会当初から、自分が生理人類学的研究を率先して行うというよりは、生理人類学の概念や研究手法および研究成果を学び、木材と人の関わりの解明に活かすという、いわばアプリケーションユーザーの立場で、学会活動に臨んできました。ありがたいことに、佐藤方彦先生が代表者だった科学研究費の分担者に加えていただいたり、信田聡先生が立ち上げたWood / Human Relations 研究部会に参画できたりして、図らずも門外漢を鍛えていただく機会に恵まれました。そうしてだんだん知恵がついてくると自分でも何かやってみたくなるもので、眼球停留関連電位という、生理人類学会では“未使用”の事象関連電位を指標にして、木材の誘目性を評価することを試みたりしました。優秀な学生にも恵まれこの研究成果

を第73回大会で披露したところ、優秀発表賞をいただきました。人類学や医学、人間工学系の発表が多い中で、木材学関連の研究発表に賞が授与されたことは誠に痛快でした。

最近では瞳孔径の変化に注目して、木材が人にもたらす精神負荷軽減効果や疲労回復効果などを評価できないか、試行錯誤しています。そのモチベーションが湧いてくるのも、この学会で多くのことを学ばせていただいているからであり、感謝の念に堪えません。きっと大したことはできませんが、今後も「木材と人の関係」を詳らかにする研究を続けて参ります。ありがとうございます。

「優秀研究賞を受賞して」

西村貴孝(九州大学)

この度は、日本生理人類学会優秀研究賞という栄誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。選考委員の先生方、学会関係者の皆様に御礼申し上げます。併せて、これまでの研究活動を導き、支えてくださった皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

今回の受賞対象となった環境適応能の多様性と可塑性という研究テーマについては、博士課程から取り組んできた自身のライフワーク的研究です。生理人類学領域でも長年議論されてきたテーマではありますが、私は特にヒトの寒冷環境や高地環境への適応能の個人差、民族差を生み出すメカニズムについて生理実験、フィールド調査、遺伝学的解析といういろいろなアプローチで取り組んできました。これらの原点は学部生時代に安河内朗先生の生理人類学で学んだ寒冷適応の民族差への興味や、寒冷曝露時の酸素摂取量の増加量や深部体温に大きな個人差あったこと等にありま。指導教員であった故綿貫茂喜先生

は私の疑問や興味に対して、大いに理解を示し、本当に好きに研究をさせてくれました。この指導方針が私の大きな基盤となっています。その後、長崎大学の公衆衛生学分野に赴任し、7年半にわたり公衆衛生学と疫学の基礎を学びました。この時期のご縁に恵まれ、ボリビアやチベットにフィールド調査へ行くことができ、自身の研究領域が大きく広がりました。この7年半で研究者として何とか立ちできる素養を身に着けることができたと思います。青柳先生をはじめ、公衆衛生学の先生方には本当に世話になりました。そして現在はありがたいことに母校に戻り、ユニークな同僚や学生に囲まれ、引き続き同じテーマで研究教育活動に取り組んでいます。今日に至る日々を支えてくれた皆様に改めて感謝致します。

学位を取得後、ちょうど10年目という節目の受賞は、これまでの研究を評価頂いたことに加え、これまでを踏まえて、もっと頑張れという激励の意味も感じております。研究でゲノムを扱うことから、最近是人类の拡散の過程で生じた遺伝的適応、日本人のルーツ、古代のヒトの生理機能、なぜお酒を飲めないヒトが有利だったのか等々に興味が尽きません。このようなロマンあふれるテーマにも生理人類学は非常に重要だと考えています。研究者人生まだまだこれからであり、より研究を展開・深化させたいと思いますので、今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど、宜しく願い致します。

「日本生理人類学会優秀論文賞を受賞して」

安河内彦輝(関西医科大学)

この度は日本生理人類学会優秀論文賞という大変栄誉ある賞を授与いただき誠にありがとうございます。選考委員の先生方をはじめ、査読いただいた先生方や関係者の皆様に厚く

御礼申し上げます。

受賞対象の論文「Cold-induced vasodilation response in a Japanese cohort: insights from cold-water immersion and genome-wide association studies」の研究において、共同受賞者である九州大学の工藤奨先生をはじめ、工藤研究室の先生方が生理実験データやゲノムデータの取得に尽力されております。本研究で実施された手指寒冷曝露実験では、被験者の血流波形データからウェーブレット変換を介し、CIVD (Cold-induced vasodilation response) に起因する可能性がある複数の生理活性を振幅強度データとして抽出しています。私にとってはこうした手法が画期的に感じ、勉強になりました。

私が本研究で主に行ったことは、得られた貴重な実験・ゲノムデータを用いて、統計遺伝学的手法により CIVD 反応を惹起する遺伝因子をゲノムワイドに探索することでした。この解析で検出した遺伝因子と CIVD との関連について検証まではまだ至っていませんが、工藤先生の研究室において遺伝子・細胞工学的手法を駆使して検証を試みる事が可能であり、ゲノムと表現型との関係をつなぐ上で強みであると感じています。

今回受賞対象となった論文の共同研究は、私にとって学びのある機会ともなりました。こうした経験を糧に、自分の専門分野の知識や技術の研鑽を積むことにより一層励みたいと思っております。最後に、今後の日本生理人類学会のますますの発展を祈念しております。この度は誠にありがとうございました。

「日本生理人類学会論文奨励賞を受賞して」

坂上輝将(筑波大学)

この度は、日本生理人類学会誌に掲載され

ました論文「寒冷水中環境での最大下運動時における骨格筋の低酸素化と解糖系代謝の亢進」に対し、2023年度論文奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文をご推薦いただきました学会各賞選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

本論文は、下半身水浸による筋温低下状態での乳酸性作業閾値強度の自転車運動が骨格筋酸素動態や解糖系代謝に与える影響を検証したものです。主な結果として、筋温低下状態で行う運動では、骨格筋酸素動態において低酸素化が見られ、解糖系代謝が亢進する可能性が示唆されました。現在、筋温低下状態での運動トレーニングによる生理応答とトレーニング効果についても研究を進めていますが、本論文における成果は、寒冷環境における運動時の代謝応答を理解する上で有益な情報となり得ると考えています。

本研究は、筑波大学博士後期課程在籍中に行ったもので、北海道大学の若林斉先生と共同で実験を行いました。若林斉先生には、実験計画の立案から測定・データ解析といった様々な面で大変お世話になりました。筑波大学に設置されている自転車エルゴメーター付き実験用水槽といった恵まれた研究環境を活用して実験を実施することができました。論文中に実験用水槽の写真を掲載しておりますので、是非ご覧ください。また、冷たい水に何度も浸かっていたいただいた被験者の皆様のおかげで貴重なデータを得ることができました。ここに感謝の意を表します。

寒冷環境における運動時の代謝応答の解明は、現在研究を進めている寒冷水中環境を利用した新たなトレーニング方法の開発に繋がることを期待させるものであり、さらなる進展が待たれます。今回の受賞を励みとしまして、

一層努力して参りますので、今後ともご指導いただけますようお願い申し上げます。最後に、ご協力いただいた筑波大学水泳競技コーチング論研究室の皆様、また論文執筆に関しまして、ご指導頂きました高木英樹先生、鍋倉賢治先生、仙石泰雄先生にこの場を借りて改めて感謝申し上げます。

「日本生理人類学会論文奨励賞を受賞して」

安田佳永(北海道大学)

この度は、私たちが Journal of Physiological Anthropology に投稿し、掲載していただきました「Venous dilation effect of hot towel (moist and dry heat) versus hot pack for peripheral intravenous catheterization: a quasi-experimental study」に対し、論文奨励賞を賜り大変光栄に存じます。本論文を推薦して下さった皆様に心より感謝申し上げます。

本論文は、博士課程在学時に取り組んだ研究です。持続的な輸液や薬剤投与などで使用される末梢静脈留置針を安全かつ確実に挿入するためには、静脈を十分に拡張させることが重要です。私たちは、臨床看護師が実践する温罨法(皮膚を温める方法)に着目し、駆血帯装着前のホットタオル(湿熱:湯で絞ったタオルをそのまま貼用, 乾熱:湿熱タオルをビニール袋に包んで貼用)の使用による静脈拡張効果を、ホットパック(ジェルがビニール素材で包まれたもの)と比較しました。本研究では健康成人を対象とし、物品の素材と湿熱乾熱刺激の視点から、温罨法前後とその後の駆血帯装着時に静脈のサイズ(超音波装置使用)や皮膚表面温度、角質水分量がどのように変化するか測定しました。その結果、ホットパックだけでなく、在宅環境や災害時にも準備可能な湯で絞ったタオルをビニール袋に包んで貼用

する方法も、有効な静脈拡張効果を得られることが明らかになりました。本研究結果は、安全で確実な末梢静脈留置針挿入に向けた静脈拡張手技の方法選択の一部になると考えております。

本研究では、研究計画に際しプレテストを何度も実施し、仮説の妥当性や介入プロトコルの検討を試行錯誤しました。特に、研究デザインや複数の生理学的なデータを正しく測定するための測定順序については、多くの助言をいただき時間をかけて検討しました。このプロセスは、次の臨床でデータ収集を行った研究デザインの検討にも活かすことができました。

最後になりましたが、研究にご協力いただきました対象者の皆様、常に温かいご指導をいただきました北海道大学基礎看護学研究室の矢野理香教授、宍戸穂助教、研究室の皆様、心血管エコー研究室の加賀早苗准教授、村山迪史助教にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

■第86回大会(関西医科大学)案内(第1報)

大会長 甲田勝康(関西医科大学)

2025年5月に関西医科大学枚方キャンパスにおいて第86回大会を開催することになりました。大阪での開催は第73回大会(岡田明大会長)以来、9年ぶりとなります。本大会では医学、ゲノム、環境、人類の観点から2つの特別講演と1つのシンポジウムを予定しており

ます。特別講演では「環境」あるいは「ゲノム」といった切り口から健康との関連についてご講演いただき、シンポジウムでは遺伝学、人類学的観点から人に関する研究に携わっている新進気鋭の研究者の方々にご講演いただく予定です。また、教育セミナーや若手の会、受賞講演、参加者会員を対象とした事業報告会も予定しています。今後、第86回大会に関する詳しい情報は、学会ウェブサイトやPANews等でお知らせいたします。

それでは、多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます。

- 1) 会期:2025年5月9日(金)~11日(日)
- 2) 会場:関西医科大学枚方キャンパス
(大阪府枚方市新町 2-5-1 :
<https://www.kmu.ac.jp/info/campus/access/index.html>)
- 3) 開催形式:対面開催
- 4) プログラム概要(予定):
 - ・5月9日(金)
教育セミナー、若手の会、理事会
 - ・5月10日(土)
一般口演、ポスターセッション、
特別講演1、シンポジウム、懇親会
 - ・5月11日(日)
一般口演、ポスターセッション、
特別講演2、受賞講演、事業報告会

■学会動静

・日本生理人類学会第86回大会

大会長:甲田勝康(関西医科大学)

会期:2025年5月9日(金)~11日(日)

会場:関西医科大学枚方キャンパス

編集後記

今回は安河内前学会長による生理人類学あれこれ(もう第7回目!), 第86大会開催案内(第1報), そして各賞受賞者の先生方の言葉を掲載することができました. ご寄稿いただいた先生方にこの場をお借りして感謝いたします. 今回, 学会賞を受賞された草野先生の手紙を拝読し, 以前の楽しく, 和気あいあいとした当時は思い出しました. このような環境づくりが学会の繁栄には必要ではないかと感じました. 今年も早いもので, 今号が年内最後の PANews となりました. 会員の皆様, 良いお年をお迎えください. (小崎)

次号予定

第86回大会開催案内(第2報)
フロンティアミーティング(秋)開催報告など
2025年3月末原稿締切(予定)

PANews 編集事務局

小崎智照(福岡女子大学国際文理学部環境科学科)
jspa-pr[at]jspa.net